富者と貧者

—— そのクム人的形態 ——

杉村和彦*

The Rich and the Poor — The Bakumu System —

Kazuhiko Sugimura*

This article aims to analyse cultural characteristics of the stratification phenomenon in African peasant societies described as egalitarian, through a case study of the Bakumu community in Zaire. Even though the Bakumu community maintains the egalitarian African custom of a common meal twice a day, a stratification phenomenon exists in which villagers themselves clearly differentiate between the 'rich' and the 'poor' clearly using their own indigenous term.

This stratification phenomenon is not the same as that of 'advanced society', which is structurally maintained through land ownership. Under the contemporary economic situation, linked with the world economy, in which a commercial economy flows into the ordinary life of the village, the Bakumu peasant keeps communal land ownership, even now. In this situation the villagers highly prize the goats as a form of social wealth (like bride price) rather than land ownership as means of production. This maintains the traditional life style of wealth in the Bakumu community. Furthermore, the rich peasants of this village seems to bear the burden of the cash economy instead of the poor through a mutual aid system in which the rich take care orphans or widows without financial compensation.

In this situation, the goat continues to play a role as an index which distinguishes the rich from the poor villagers. Therefore the phenomenon in which a cash economy plays the role of an index for differentiating the peasants is not seen in the traditional Bakumu community.

Through the above process, Bakumu society reduces the influence of a commercial economy which promotes differentiation among peasants. This helps to maintain a highly egalitarian society in the material level.

* 福井県立大学

Fukui Prefectural University

1. はじめに

1.1 課題と方法

サハラ以南のアフリカ農村の今日的動態は、一方では、経済の商品化、農民社会の経済的な差異化という他の地域社会に共通する現象を伴ないながらも、他方ゴラン・ハイデンが、「情の経済」¹⁾という言葉に託して述べたような、「分与の経済」というべき社会的伝統が色濃く残され再生産され続けており、アフリカの中に展開する経済動態の文化的特性を内側からささえる役割を果たしていることが指摘されてきた。

しかしこれまでのアフリカ農民経済の動態的研究においては、従属理論のようなマクロな視点を背景とした階層分化論²⁾が多数をしめ、その差異化の様態を共同体内部にまで踏み込んで明らかにするという作業が欠落していた。他方コミュニティーレベルでのミクロな人類学的研究においても、多くは静態的な文化分析³⁾に焦点があてられ、経済動態の内的構造と地域社会における意味、いわばその文化論的分析というべきものが欠落していた。このような中で、世界システムと伝統的なアフリカ農民経済の接合の中に揺れる「動態」のアフリカの性格を検討していく作業は、これまできわめて少数の事例⁴⁾に限られていたといっていよい。

小稿は、以上のような研究動向を踏まえながら、ザイールの焼畑農耕民クム社会に見られる農民間の差異化の構造が、アフリカの焼畑農耕民社会に強くみられる平準化の機構とどのような構造連関をもつかを検討していくことにある。以下その含意するところを従来の研究史との関連であらかじめ述べておきたい。

第一点は、農民の階層化状況に関わる文化論的な視点に関するものである。今日、多くのアフリカ農民経済の動態を扱ってきた研究が示すように、農民間の富の偏在、それにもとづく差異化が展開し、その階層差はさらに拡大しようとしている。しかし農民世界の内部に視点をむけ、その差異化の様態をとらえることは必ずしも容易なことではない。

まず土地保有の差異にもとづく「階層分化」と

いう、われわれの社会の中で一般に認められた階層論の基準は、多くのアフリカ農民社会の中では通用しない。とりわけ本稿が対象とする赤道アフリカの焼畑農村地帯では、今なお土地は慣行的には共同体的保有⁵⁾である場合が多く、共同体内部のすべての成員に平等に用益権が認められている。そして日本では、農民世界の内部からの視座を重視した掛谷⁶⁾などの研究が指摘してきたように、アフリカ農民社会の中に伝統的にみられた互酬性に基づく平等主義的な生活様式は、商品経済の流入した農村社会の中でも、現金で購入したビールを共飲するなどのふるまいとしての分与や贈与というかたちで再生産されている。

このように、突出した富の蓄積者の出現をはばみ、差異化の固定性を常に解消する方向に働くベクトルをもつ、アフリカの農民生活の内部に光をあてるならば、外部世界からの視座がそれをわれわれの世界と同様の「階層現象」としてとらえるものも、その実態としては、きわめて質の異なる現象として展開していることが予想される。

それゆえアフリカ農民社会の「階層現象」を前にしてさしあたり重要なことは、差異化が現象しているとみえるその内的構造に分け入り、それを主題化し、その差異化の様態を具体的に取出していくことであろう。江口は、西カリブで農民間のランキング⁷⁾に関する研究を展開しているが、外的な基準とは異なる農民内部の相対的評価から、その富のありようを取り出すものとして、アフリカ農民社会の「階層」研究にとっても方法的な示唆を与えているといえよう。

本稿も具体的な分析のレベルでは江口の方法を援用し、クム社会の農民間の階層現象を考察していくための出発点としている。しかし江口の対象としたカリブ海の農民社会と比較して、平準化機構の極めて強いアフリカ農民社会の「階層現象」がもつ問題は、農民次元で階層現象が存在することをいかに明らかにするかという江口⁸⁾の提起にとどまるものではない。むしろここで重要なことは、差異化と平準化の中での富者と貧者の関係とその様態であり、階層化を拒むように見える、農民経済の全体のメカニズムのなかでの、差異化の

ありようが主題化されなければならない。

このようなアフリカの農民社会に見られる「平等主義」経済における、富者と貧者の生成のメカニズムは、さしあたり、分与をし続ける富者と平準化する富を指摘したサーリンズの「未開の経済」⁹⁾の中に、類似する像を見出すことができる。しかしここでの議論は、サーリンズの分析した閉じられた「未開の経済」¹⁰⁾とは異なり、商品経済の流入した動態の場を主題としており、以下の二つの側面への留意が必要であろう。サーリンズは、「未開の経済」「未開の交換」の中では、食べ物をはじめとして必要物は基本的に分けられるものであり、富となるものは、婚資や社会的代償などの社会的交渉の場で使うものに限定されると指摘している。しかし今日、アフリカ農民経済の動態における主要な差異化の基盤は、商品化する食料作物¹¹⁾の生産規模の差異化であり、それゆえ伝統的な富の存在形態と商品経済が流入する中での富の存在形態との相互の関係性を明らかにしていくことが要請される。

次に平準化システムそのものの動態という側面である。گران＝ハイデンの「情の経済」論は、今日のアフリカ農村における経済動態の中で再生産されていく、「平準化のメカニズム」を指摘しているが、平準化の次元と内容については具体的な分析¹²⁾を欠いている。平準化にも、共食のような日常のレベルの分配行動から、結婚などの非日常的な機会での社会的富の分配、さらには都市化現象¹³⁾の中で見られる居候のようなものまで、様々な形態が見られる。それゆえ商品経済が流入する中で、農民間の差異化と平準化の動態的な構造を明らかにするためには、このような平準化の機構のどのような側面がどのように変容し、農民間の差異化の特質と連関しているかを具体的に分析していくことが重要であろう。

第二点は、以上の事柄とも関連することであるが、アフリカ社会の農民経済の構造と特質¹⁴⁾に関する本稿の分析手法にかかわる問題である。日本の農民経済を対象とした場合には、生産経済と消費経済が結合した農家を単位とした経済が問題となる。日本の農家は、土地を媒介とした家産の

継承の永続性のある単位であり、日常の生活においても、農家間に明確な境界を設けることができる。しかしアフリカの農民経済では、このような単位性を確定できる家族制集団を特定できない場合が多い。

このようにアフリカの農民経済は、伝統的には家族の重層構造によって支えられた入れ子状¹⁵⁾の経済体としての枠組みを有している。しかし、これまでのアフリカ農民経済の動態論の多くはとりわけ商品化の中でアトム化した農家世帯を前提とした議論を繰り返しており、「階層状況」の把握においてもこのような分析枠自身が多くの問題を作り出してきたといえるだろう。

それゆえ、ここではクム社会における農民経済の動態を世帯と拡大家族の関係という重層構造¹⁶⁾の中でとらえていく。事例とするクム社会においては、トアといわれる拡大家族が具体的に世帯を越える極めて強い単位性を有している。このトアは共食集団としても機能しており、極めて強い平準化の働く場である。それゆえ、以上のようにクム社会の世帯のレベルであられる富者と貧者の関係とその差異化が意味する内容を、平準化システムとの関連でとらえていくために、とりわけここでは世帯とこの「共食集団」の相互の関係性に注目しつつ検討する。

次章ではクム農民経済の構造と動態の様態を分析し、第三章では、農民間のランキングの現状とその基準を検討する。第四章では、以上を踏まえて富者と貧者の相互の関係性とその様態を分析する。

1.2 調査方法

本研究は1986年11月から1987年1月、1989年10月から1990年1月、1990年10月から1991年1月の3回にわたるオレマ集落での実態調査によって得られた資料の一部にもとづいている。オレマ集落の全戸の経済状況と階層に関する調査は1986年に予備的に行ない、1990年には本調査を行なった。ここでの農民のランキングについてのデータは、1990年の本調査の結果を用いている。またオレマ集落内での「共食」集団の調査データに関しては、

1989年にキサンガニ大学教授バヤ氏、キンシャサの芸術高等専門学校の講師コンゴロ氏とともにおこなった調査結果の一部が用いられている。

2. クム焼畑農民経済の構造と動態

2.1 キサンガニ周辺農村における商品化と農民の生活経済

アフリカの奥の奥、ザイールの第三の都市、キサンガニの背後に広がる熱帯雨林。そこには焼畑を生業として営む人達が暮しており、畑はすべて、バナナ、トウモロコシ、キャッサバ、コメ、ヤマイモなどからなる混作畑¹⁷⁾として経営され、全く何の秩序もなくばらばらに植え付けられているように見える。このように農村景観に目をむける時、原始の世界を彷彿とさせる熱帯雨林下の小農世界も、今日、外部社会から閉ざされた自給自足の社会ではない。世界システムと連動する商品経済は、村の生活を確実に揺るがせ始めている。ここでは、このようなキサンガニ周辺の焼畑農村の一つであるクム社会(図1)を事例として、村の内部から具体的な農民の生活経済の様態を取り出しておこう。表1は、キサンガニから南東240キ

ロメートルのところにある、クム社会の中核地帯の一つルブツの町に近い、オレマ集落の1人のクム人、U氏の1986年の11月～12月の約1ヶ月間の日々の生活記録に基づいて、農家世帯の家計の内訳を示したものである。U氏は当時30才、1人の妻と男の子供が3人いる。

焼畑農民として彼は、焼畑耕地を年に1度約1ヘクタールほど開墾し、妻とともに経営している。農地には、トウモロコシ、キャッサバ、コメ、バナナを植えてついている。そこで生産されたコメの半分以上が販売されているが、一方、バナナ、トウモロコシ、キャッサバの多くは、自給用に当てられている。しかしお金が必要になると妻が暇を見つけては町の市に行き、バナナやキャッサバも販売して現金にする。生活記録の中にも、1ヶ月の間に二度売られ、現金を手に入れている様子をうかがうことができる。ザイール経済は、極めて急速なインフレを経験しているが、この記録をとった1986年の時点で、50ザイールが1日の賃金に相当し、市販されるビールが1本購入できたが、1990年にはこのビールが10倍に値上がりし、500ザイールになっていた¹⁸⁾。

この農民の収入は、このような農産物の販売以外にも、狩猟で獲得した野生肉を販売したり、金・ダイヤモンドの採掘¹⁹⁾に行ったりして得ている。妻も時には金・ダイヤモンドの採掘に出かけ、その収入の一部を担っている。しかし日常的に彼が有する現金は極めてわずかなものであり、かりにかなりの現金を得てもインフレによってすぐに価値が半減してしまう。

図1 クム人のテリトリー

表1 ザイール、トワビング村、オレマ集落
U氏の約一ヶ月にわたる家計の内訳

*単位はザイール

生活必需品(塩、石鹸など)	70 (7.7%)
薬代	50 (5.5%)
病院治療費	350 (38.3%)
酒代	175 (19.1%)
主要食糧品費	0 (0 %)
マカヤボ(干し魚)	140 (15.3%)
肉	110 (12.0%)
石油	20 (2.2%)
合計	915 (100 %)

このように各農民の現金所得が拡大する中で、自給経済も含めたクムの生活経済全体の中での現金を扱う単位としての各世帯の単位性は、かつてと比較して著しく高まっている。たとえば子供が学校へ通うようになればノートなどの学費がかかる。また家族の誰かが病気にでもなれば、できれば市販している薬を購入する必要がある²⁰⁾。病院に入院しなければならないような重病ともなれば、兄弟や親族が財政的にも援助してくれるが、通常の病気の薬代は、各人が負担していかなければならない。そして表1に示されるように、塩、石鹼、ランプ用の灯油は生活の必需品になっており、またここでは示されていないが、生活費における服飾品の占める割合も大きい。

2.2 農民経済の重層性と共食集団

しかし一方で、この地域に残された自給的世界に目を転じていくとき、世帯という単位性はゆらぎ、世帯を越えた大家族や父系のリネージなどの単位性が、世帯とともに併存し、むしろそれを包摂するものとして立ち現れてくる。村の内部の生活では、農民の間では何らかの親族関係が成立し²¹⁾、その親族関係の中では、農民を動かす原理は、非人格的な貨幣原理ではなく、ものを与える・与えられる、あることを手伝う・手伝われる、という人格的な人間関係の相互の関係性として展開していく。

実際、自分の近いリネージに属するものであれば、そこに行けば必ず食事を提供してくれる。そしてもしその年、自分の畑が不作であったり、病気や怪我で畑が耕作できなかった場合であっても、そのようなリネージの仲間や、姻戚、友人に相談すればたくさん畑を作った人がその一部を分けてくれる。

そしてクム社会で、このような「食の平等性」を一つの制度として支えているものが、以下に述べる共食慣行である。共食とは、日本の村において見られるようなハレの日に食事を共にする習慣ではなくて、日常的に数家族の人がともに食事をする習慣を指す。通常、男女が別れて食事をとり、男性は集落内のそれぞれの集会所（トア）で共食

する。それは、クムの農村社会の中で一種の「公的」な活動としての意味を持っている²²⁾。

この共食集団の構成を作り出すものは、メンバーの個人的な友人や被扶養者が参加することもあるが、基本的にはリネージの系譜²³⁾である。リネージとは、共通の祖先からたどられる出自を同じくする人々の集団であり、父系制のクム社会においては、共食集団²⁴⁾は、男性の系譜によってたどられるほぼ5世代ぐらいの深度をもつ最小リネージ内部の成員によって組織されている²⁵⁾。

このようにクム農民によって営まれる経済は、日本の農家のように明瞭な輪郭を持つ経済単位のもとに展開しているわけではない。ここでいう農民経済を、さしあたり農民の家族経済によって生み出されたものとするならば、その家族が世帯から拡大家族へ、さらにリネージへと入れ子状の重層構造をもつところにクムの農民経済の一つの特色があるといえるだろう。

以上を踏まえて、オレマ集落における共食集団の構成と世帯との関係を検討しておこう。オレマ集落には、クム語でオスコワンといわれる四つの大きなリネージが存在している。オスコワンとは、クム語で「何々の孫たち」を意味する。そのオスコワンは、クム語でトア²⁶⁾といわれる1～5の最小リネージによって構成されている。この最小リネージであるトアは、それぞれが集会所となる小屋を有しており、1日に2回共食を行なう単位となっている。表2には、この四つの大きなリネージとトアとの関係、及びトア内部の世帯の構成内容が示されている。集落内部の「共食」の場を観察すれば、数十人にふくれ上がるグループから、いつも5～6人で共食を行っているグループまで多様なかたちが認められる。それは、表2に見られるように、オレマ内部のトアの構成世帯数には3世帯から17世帯まで大きな差異があることに示されている。

図2はオレマ集落内部での、このトアと世帯との関係を図示したものである。集落は道沿いに並んだ列状村をなしており、ルブツの町から奥地の集落であるベネルータへの方向にオスコワンビナ、オスコワンビガレ、オスコワンビメ、オスコワン

表2 オレマ集落における共食集団の構成

上位の リネージ名	共食集団名	世帯	総数	内 訳			
				世帯主	妻	子供	被扶養者
Osukwanjali	(1)Osukwausume	9戸	56人	9	10	26	11
	(2)Osukwaabantwa	7戸	27人	7	7	10	3
	(3)Osukwamaina	7戸	34人	7	8	6	13
	(4)Osukwamangaya	8戸	42人	8	8	20	6
Osukwanbime	(1)Osukwanissa	7戸	21人	7	7	3	4
	(2)Osukwandwebe	10戸	44人	10	11	14	9
	(3)Osukwanmkfe	3戸	11人	3	3	5	0
	(4)Osukwanbonbo	5戸	12人	5	5	2	0
	(5)Osukwanseko	7戸	31人	7	7	14	3
Osukwanbegale	(1)Osukwanbegale	17戸	74人	17	19	22	16
Osukwanbina	(1)Osukwamongolo	5戸	21人	5	5	11	0
	(2)Osukwanebondo	12戸	57人	12	12	29	4
	(3)Osukwaabamalima	7戸	35人	7	7	19	2
	(4)Osukwamabongela	5戸	14人	5	5	4	0
合計		109戸	479人	109	114	185	71

図2 オレマ集落における家屋の配置と共食集団

○ は一つの共食集団

ジャリという四つのリネージが居住集団を形成している。そしてその下位単位であるトアは、一般に道の両側にそれぞれ固まって居住集団を構成し、毎日朝夕にはそれぞれの集会所（トア）にメンバーが全員集まり、共食による食事を行っている。

3. 焼畑農民間のランキングとその基準

3.1 「富者と貧者」の確認

共食に生きるクム社会の中では、村人の日常的な行動や住居、衣服などに関する生活のレベルを見るかぎり、村人の間に大きな経済的な差異があるようには思えない²⁷⁾。しかし村人の中では、富者と貧者というカテゴリーが明確に存在する。スワヒリ語では富者をタジリ、貧者をマスキニといい、またクム語でも富者をムツアマーイ、貧者のことをドゥナケマという。「誰それは富者か貧者か」とたずねると、「彼はお金持ちだよ」とか「彼女は貧乏だよ」とかてきぱきと答えてくれる²⁸⁾。

村人が判別する各農民の家族構成、所有物、仕事、収入などの生活状況に対する認識は、繰り返される日常の相互交渉の中で作り出されたものであり、少なくとも一つの集落の範囲では、他の人の暮しぶりについて一般の人でもかなり正確な情報を有している。このような状況の中で村の人々が相互の間の裕福さをどのように認知し、それが客観的な「富」の保有状況とどのように連関するのかを下記のような手続きで検討²⁹⁾していった。筆者は3人の村人を選択した。

このうち1人は、オレマ集落も含む五つの集落からなるトワビンガ村の村長であり、あとの2人は中年層からA氏、青年層からB氏を選択した。村の中でそれぞれ高い信頼を置かれている人物である。そして全世帯の家長である男性109人分の台帳をもとに、まずそれぞれに村人の富裕度³⁰⁾を上層農、中層農、下層農の三つのランクに区分してもらい、さらにその後、各層を三つのランクに分類してもらった。

3人は³¹⁾、村人たちの経済状態とその間にある差異を実によく熟知しているが、しかしここ数

年金・ダイヤモンド鉱掘りに明け暮れたり、病気などで一時的に村に不在の者、また共食を行う集会所が遠く、お互いの間で日常的に付き合いがないなど何らかの理由で、上記の3人がそれぞれ熟知せず、判別が不明瞭であったものが数名ずつおり、それゆえ3人が共通に明確な判別を行なった101名についてのみ、以下で分析することにした。

その結果、被調査者101世帯のうち、10軒が上層農、40軒が中層農、51軒が下層農に分類され、さらに上層農の内部では、6名がその中で上位、3名が中位、1名が下位にあるものと判断された。また中層農内部では、12名がその中で上位、26名が中位、2名が下位にあるものと判断された。さらに下層農に分類されたものの中では、3名がその中で上位、27名が中位、21名が下位に分類された。

また年齢構成では、20才から29才までが27%、30才から39才までが41%、40才から49才までが13%、50才から59才までが9%、60才以上が11%になっている。表3はこの各世帯のランキングと年齢構成との関係を示したものであるが、年齢と農民のランキングの間にはほとんど関係を見つかる

表3 農民間のランキングと年齢構成

階層 / 年令		20-29	30-39	40-49	50-59	60-
上の上	6	1	3	2		
上の中	3	1	1			1
上の下	1		1			
中の上	12	1	9	2		
中の中	26	10	8	4	1	3
中の下	2		2			
下の上	3	2		1		
下の中	27	8	11		3	5
下の下	21	4	6	4	5	2
合計	101人 (100%)	27人 (27%)	41人 (41%)	13人 (13%)	9人 (9%)	11人 (11%)

ことは難しいといえるだろう。村人の一番成員数の多い30-39才までの年令をみれば、上層農で5名、中層農で19名、下層農で17名の者が区分されて示されている。また60才以上の老人においても、上層農に区分されたもの、中層農、下層農に区分された者がそれぞれ存在している。このように、基本的に各年令層にそれぞれ富者と貧者が分散されて区別されていることが明らかとなる。

3.2 山羊とクム社会における富のゆらぎ

彼らの中ではほぼ一致をみることになるこのような富者像や貧者像も、しかしわれわれの目から見ると判別がつかない場合が多い。村の人にとって富者とは誰であり、貧者とは誰であるのかを考えるうえで一つのヒントを与えてくれたのは、1986年の10月、村で生活をするようになって少しばかりたった夕暮れの時だった。昼間は森の中や藪の中に四散してほとんど見ることもない山羊が、夕方になると、村の役所のある広場にやって来て、40頭ほどが群れを作る。

その山羊をぼんやりと眺めている時、隣りに座った友人が「村の中で豊かか貧しいかの区別は、この山羊を持っているかどうかがサインになるんだよ」と、ふともらした言葉が、クム社会における富者像と貧者像をわけける基準を問い直す上での一つのきっかけとなった。

クム社会における山羊³²⁾は、乾燥地帯に適応したサバンナヤギと比べると、体も小さく、肉用に用いられるだけで、乳用に利用されることは全くない。また、この地域を対象とした先行研究が³³⁾具体的な分析を進めたのは焼畑か、それを行う農民の兼業形態としての採集、狩猟であり、焼畑農民の家畜や家禽が主題的に取り上げられることはなかった。

しかし他の多くの村人に聞き込んでいっても、たしかに山羊の価値は高い。クム社会で山羊に高い社会的価値が付与される源泉の一つは、婚資としての利用である。妻が死ねば、その姻族は夫方の親族に婚資の一部を返さなければならないが、その返却品の中に山羊が必ず含まれている。また婚資以外にも、葬式や様々な社会的問題を処理す

る際に山羊³⁴⁾は利用される。

この社会的富としての山羊は、クム社会にかつて存在したといわれる伝統的貨幣に近似した意味を有している。クムにおけるこの伝統的貨幣³⁵⁾には、今日の一般的な貨幣からみると大きな違いが存在した。まず第一にこの伝統的貨幣は、社会的交渉に限定されたもので、とくに婚資としての意味が大きい。伝統的には年長者が管理し、必要な時それぞれの成員に有分するものとして存在していた。第二に、この伝統的貨幣は、農作物や他の物資と交換することはできなかったということである。

そして村人の話では、この伝統的な貨幣の価値は一義的にはそれによって妻をふやし、家族を拡大をすることを可能にすることにあった。伝統的なクム人の考え方の中では、たくさんの子供に囲まれること自体が、その人の「豊かさ」を示すものであったといわれる。表4³⁶⁾はオレマ集落での村人の意識調査によって、現在の彼らが財産と考えるものを集計した結果である。その主要な財産項目は、商品化する畑の作物や社会的に価値の高い山羊などであり、現金が緊急に必要となればこれらを売ってその場を凌ぐことも多い。しかし同時に表4の中にも示されているように、今日でも他の物はさておき、子供こそが財産だと主張する人が少なからず見られ、この地域の伝統的な社会的価値意識を表している。

山羊³⁷⁾は、その扱いにおいて、この伝統的貨幣と共通した利用形態を有してきた。一つはその管理³⁸⁾がしばしば年長者にゆだねられ、社会的

表4 オレマにおける財産のカテゴリー

項目 人数	子供	畑	山羊	鶏	山羊	服	時計	ラヂオ 他々
54人 (100%)	19人 (35%)	39人 (72%)	23人 (43%)	5人 (9%)	21人 (39%)	8人 (15%)	2人 (4%)	2人 (4%)

*54人に対するアンケート調査

回答項目には重複がある。

交渉の場やハレの日だけに利用される物であり、日常的にほとんど食されることはなく、また「食物」などとの交換はまずなされなかったことである。

しかし、かつての伝統的な貨幣の限定性からみると、すでに今日のクム社会における山羊は、商品として購入することも可能な物であり、また必要な時は販売し、生活のために使われる。伝統的な価値形態は、商品経済が流入する中で急速に相対化されつつある。それゆえ「山羊の価値を語る」クム農民の言説の真偽を明らかにするためには、さしあたり他の財との関係の中で、その相対的な位置を明らかにしなければならない。

3.3 農民間のランキングとその基準

1) 富の類別と農民間のランク

本節では以上の検討を踏まえて、伝統的に威信財として見なされた山羊とランクとの関係の相対的位置³⁹⁾を、今日のクム人の主要な財と考えられる耕地、現金収入との関係で検討する。

a) 耕作地の規模とランク

表5⁴⁰⁾はオレマの事例にもとづいて、まず耕作地の規模と農民間のランクとの関係について検討したものである。土地経営に関しては、クム社会の中では今日でも共同体的保有が維持されており、オレマ集落の中ではすでにみてきたように、オスコワンピナ、オスコワンビガレ、オスコワンビメ、オスコワンジャリという4つのリネージが

保有の単位をなしており、村の成員は、それぞれが属するリネージの保有地から必要とする耕作地をリネージの長に申し出て開墾する権利を基本的に有している。このような共同体的保有のあり方を通して、土地利用に関しては基本的に平等な権利が維持されており、農民の耕作規模にも大きな差異は存在しない。表5に示されるように、上層農の77%、中層農の74%、下層農の67%がそれぞれ1ヘクタール開墾しており、ほとんどの農民の耕作地が1ヘクタールの規模に集中している。

このようにクムの耕作規模は、農民間のランキングとはあまり関与しないかたちで展開しているといえるだろう。もちろん微細に見れば、ランキングとの関係で耕作規模に差異がないわけではない。表5に示されているように、下層農に位置する農民の間で1ヘクタール未満の農家が若干増える傾向がうかがえる。しかしそれは極めて微細なものであり、とくに上層農と中層農の間には、規模をめぐる差はほとんど存在しないといっていよう。

b) 現金収入とランク

現金収入と農民間のランクの関係について、次に検討しておこう。クムの農民の収入源は、伝統的には農産物、狩猟による野生肉、さらには背負い籠、蒸溜酒、食料油などが中心であったが、1980年代になると、金・ダイヤモンドの採鉱による収入機会も極めて高いものとなっている。表6⁴¹⁾に示されるように、上層農に位置づけられた人の中には、70万ザイール、80万ザイールと飛び抜けて高い所得を上げている者があり、少ない人でも、5万ザイール以上の収入を上げている。しかし、中層農や下層農に位置づけられた農民の中には、5千ザイール未満の収入のものが50%前後の割合で存在しており、現金収入は上層農とそれ以外の農民を分かつ重要な指標として機能していることが推察できる。

これに対して、下層農にランクされる者の中には、確かに2万ザイール以下の低収入に甘んじている者は、他のクラスと比較して多いが、その一方で10万ザイール以上の収入を上げている者は、中層農と比較してむしろはるかに多く⁴²⁾、50万

表5 オレマにおける住民のランクと耕作面積

面積 (ha)	上層農 9人	中層農 35人	下層農 42人
1.5以上	1 (11%)	4 (11%)	
1.5			1 (2%)
1	7 (77%)	26 (74%)	28 (67%)
1		4 (11%)	6 (14%)
0.5			
0.5	1 (11%)		2 (5%)
0.5以下		1 (3%)	5 (12%)

ザイルから20万ザイルまでが18%, 20万ザイルから10万ザイルまでが27%, 併せて45%の者が10万ザイルを越える収入を得ている。

このように現金収入は上層農とそれ以下の層を区別する指標としては、一定の役割を果たしていることがうかがわれるが、それ以下のランクにおいては、必ずしも農民間のランクを分かち明瞭な指標としての役割を果たしているとはいえない。

c) 家畜保有とランク

最後に、山羊の保有数と農民間のランクの関係について検討しておこう。インフォーマントのなかで、山羊を保有しているものは、全体の30%であり、保有数には最高9頭から0頭までの差異がある。表7⁴³⁾は、このインフォーマントの回答をもとに山羊の保有頭数とランク関係を比較して明らかにしたものである。表7に示されるように、8人の上層農の中で山羊を保有する者は5名で、63%をしめるが、ほかのランクの人の山羊の保有率は低く、中層農では、58%, 下層農では、84%の人が山羊を持っていない。

表7にも示されるように、確かに上層農の中にも山羊を持たない者がおり、一方では、中層農にランクづけされた者の中にも、上層農に評定され

た者も持ち合わせないような7頭もの山羊を持つ者もあり、山羊だけでランクを語ることはできない。しかし全体的な傾向性としてみるならば、上層農に評定されたものが中層農に評定された者より多くの山羊を保有し、さらに中層農に評定された者が、下層農に評定された者より、多くの山羊を保有するという家畜保有と農民間のランクの間の相関的な関係性をうかがうことができる。

2) 農民間のランキングとその基準

以上の検討からさしあたり以下の二つのことがらが明らかになってくる。一つは、「山羊を持つかどうか農民が豊かかどうかをきめるしるしだ」という農民の言説の一定の妥当性である。上記の山羊の保有とランクの関係において見たように、上層農から中層農、下層農に向けて段階的に山羊の保有が減少していく傾向が存在し、確かに「山羊を持つこと」と「富者である」ことの間の一定の関係性を指摘することができる。そしてその関係性の有意味性は、耕地や収入と農民間ランクとの間の相互の関係と比較するならば、より明確になってくるといえるだろう。

焼畑を生業とするクム社会の中では、日常生活の多くの時間は、その営農作業のために費やされており、また農業の商品化がすすんだ今日では、農作物の販売を通していかに多くの現金を獲得するかということに強い関心を持っている。村人の

表6 オレマにおけるランクと収入

収入 (ザイル)	上層農 5人	中層農 25人	下層農 22人
500000 以上	2 (40%)	1 (4%)	
500000 └ 200000	1 (20%)	1 (4%)	4 (18%)
200000 └ 100000	2 (40%)	1 (4%)	6 (27%)
100000 └ 50000		9 (36%)	2 (9%)
50000 └ 20000		12 (48%)	3 (14%)
20000 └ 10000			3 (14%)
10000 未満		1 (4%)	4 (18%)

表7 オレマにおける住民のランクと山羊の保有数

山羊 頭数	上層農 8人	中層農 38人	下層農 50人
7		1 (3%)	
6	1 (13%)		
5	1 (13%)	2 (5%)	
4			1 (2%)
3		4 (11%)	
2	1 (13%)	6 (16%)	2 (4%)
1	2 (25%)	3 (8%)	5 (10%)
0	3 (38%)	22 (58%)	42 (84%)

多くは、今日では、畑を自らの「富」、あるいは「富」を生み出していく源泉だと考えている⁴⁴⁾。

しかし畑の規模にはほとんど差異が生まれず、農民間のランクの源泉にはなっていない。この背景には、今日においてもクム農民の中に、「食物」は基本的にお互いの中で分けあう物、また分けられる物であるという価値意識があるからだといっ
てよいだろう⁴⁵⁾。これに対して農民の意識の中には、今なお社会関係を調整していく威信財としての山羊の高い位置づけがあり、その所持の有無に基づいて、ランクの差異が意識されている。

一方、「現金収入」との関係においても、「山羊」を持つ者とランクの間の農民全体に渡る、一貫した相関関係が浮き彫りになる。確かに表5に示されるように「収入」は上層農と中層農を分かち一つの指標になっている。しかし一方で収入をかなり稼ぐ者の中にも下層農として貧者のカテゴリーに属する者も多く、収入指標をめぐってむしろ下層と中層農の間にある種の逆転現象が存在しており、山羊とランクの間のような農民全体に渡る相関性を見ることができない。このように今日においても農民間のランクの形成にかかわる「山羊」の高い価値が他の財との比較の中で明らかとなり、「土地」、「収入」を指標とするこれまでのアフリカ農村の階層現象に関する分析の視点ではとらえられないクム農民の価値意識のあり方が浮き彫りにされてくると言えるだろう。

しかしここで同時に確認しておかなければならないことは、彼らの語る「山羊は農民の豊かかどうかをきめるしるしだ」という言説も、あくまでも彼らの生活世界の中では相対的な意味しか持たない言葉であるということである。すでに検討してきたように、山羊をもたない人、あるいはわずかしか持たない者の中にも「富者」であると考えられている人は少なからず認められ、また富者と考えられる者より多くの山羊を保有する者のなかにも、貧者と考えられる者がいる。

このように富者のカテゴリーに内包された異質な要素に目を向けてみれば、明らかに山羊を持つということと富者であるということの間には大きなズレがある。以下で検討するように、そのズレ

の中に、今日の農民経済の動態の中で、新たに創出されているクム人の「富者」と「貧者」の存在形態が浮かび上がってくる。

4. 富者と貧者—そのクム人的形態

4.1 富者像と貧者像

ここではまず、前節で検討した上層農、中層農、下層農の各ランクに属する世帯の中で、その属性の内部の差異に着目しながら、詳細な聞き取りを行うことのできた人を中心に、いくつかの典型的タイプの人物を取り出し、その概要を記述しておきたい。

1) 上層農の世界

<カルメ>

上層農の中の上位のクラスに評定されたこの年少の若者を、村の人たちは、口々に大変金持ちだという。30才の青年であるが、見るからにたくましく、物の言い方も同じくらいの青年からすると大人びてみえる。子供はいまのところおらず、保有する山羊もいないが、すでに二人の妻があり、それぞれの妻のために大きな畑を切り開いており、併せて毎年1.5—2ヘクタール近くの耕地を経営している。体力も強健であり、金・ダイヤモンドの採掘にも折りを見つけて行き収入を得ている。

畑から得られる現金収入も金・ダイヤモンドなどからの現金収入も他の村人から比べると多いが、なにより村の中でもかれを金持ちにしているものは、酒造りによる収入である。ロトコ⁴⁶⁾というキャッサバやトウモロコシから造られる蒸留酒は、村の男が日常的に愛飲するものだが、彼は、この酒造りをオレマ集落の中では一番大がかりにやっている。しかし彼自身は酒を飲まない。一度オレマ集落から13キロメートルのところにあるルブツの町で生活したことのある彼は、その間に、蒸留酒用の道具作りを友達から習い、村に帰ってくると、独力でそれを作り、酒造りを始めた。

生活費、家計における日常的な出費から比べると、このロトコ（一本100円相当、ほぼ一日の労賃に当たる）の飲み代は、極めて高く、村の中の

愛飲家の男連中の中には、酒の飲み代が高んで、ずいぶん彼から借財している場合もある。さらに彼は事業の拡大を考えており、近くのルブツの町に家を建て、一人の妻に小さな商店を経営させることを考えている。

<ファキ>

オレマ集落の中に住む、たった一人のムスリム⁴⁷⁾であるファキ老人(71才)は、富者の一人に数えられて、上層農の中位のクラスに評定された。すでに高齢であるが、いまだ健康であり、焼畑などに関しては村の平均の1ヘクタールの規模を維持して経営している。彼は非常に質素な服をまとい、普段見かける姿は、富者には似つかわしくない様子であるが、村人の中で、はじめてニワトリを私にくれたのが彼であった。その後もしばしばニワトリのたまごを一つ二つともってきてくれた。

村の知人の話では、ファキ老人は、何か困ったことがあった時、たとえば若者が婚資の山羊を調達するのに困っているような時などに、何もいわずにそっと1頭提供してくれるタイプの人だという。彼は毎週金曜日には12kmほど離れたルブツの町まで通う敬虔なイスラム教徒であり、竹細工のかごを編み生業としている。山羊の所有に関しては10頭と村一番であり、妻の親族・姻戚関係を含めて、多くの被扶養者を世帯の中に抱え面倒を見ている。また金銭や物資の管理に関しても極めて清潔な人柄で村人から非常に信頼されている。

<ラマザニ>

上層農の中の下位クラスに位置付けられたラマザニ(31才)は、村の中では、中学校の5年を終えたインテリだ。向学心も篤く、調査の有能なアシスタントとして活躍してくれた。酒は一滴も飲まない熱心なプロテスタント⁴⁸⁾であるが、すでに妻は二人おり、第一夫人に4人、第二夫人に1人の子供がいる。山羊などの財産を特にもたない彼の収入源は、ミシンによる洋裁の仕事だ。オレマ集落の中にはラマザニ以外にも3人のミシンの保有者がおり、その仕事を行っているが、その人達と比べてもラマザニはきわだって腕が良く、注文も多い。特に年末になるとクリスマス、新年の

晴れ着を作るために集落以外の人からも注文が入り、大変忙しい毎日となる。

この技術をラマザニは、ルブツの町の中学校にいつている間に友人から教えてもらい、村に帰った後、努力して貯蓄し、ようやくミシンを買うことができた。腕のいい彼の所には、時折集落以外からも洋裁の仕事をする人が来て一緒に仕事をしたり、また彼に仕事のやり方を教えてもらったりしている。

ラマザニ自身の説明によれば、この収入手段は、本来ならさらに高い所得をもたらすはずだが、村のなかでやっているとなかなか決められたかたちで仕立て賃をとることが難しい。親しい友人の中では、いくら頑張っても仕事をして友人だからということで代金を取り立てることができず、しばしばただ働きになることがあるという。

2) 中層農の世界

<アリエニ>

中層農の中の上位に評定されたアリエニ(33才)は、妻一人と子供が3人いる。農業の経営や、金・ダイヤモンド掘りによる収入もそこそこ上げているが、安定した現金収入源は、デリジャという仕事である。これは村の治安を維持するための下級の官吏の役割であり、少ない額ではあるが一定の収入がある。彼はオレマ集落の中で一、二を争う情報通であり、村人の生活の詳細を熟知しており、村人の信頼も厚い。そして彼の性格を示すものとして特徴的な事柄は、分与の世界に生きる人の徳をよく身につけていることであろう。

彼はデリジャとしての仕事柄、村のスポークスマンとして村人の人格的評価を私にもしばしば語ってくれたが、そのなかで彼は<分けること>の重要性を何度も強調していた。村の中でいろいろな問題が起こる度に、彼はその現場に出向き、村人の間の調整を図っている。

<マフエ>

中層農の中位に評定されたマフエ(33才)には、妻が1人いるが、子供はいない。彼は、人並みに焼畑を耕作するかたわら、ロトコ作りや、アブラやしの搾油の仕事も行ない、また金・ダイヤモンド

ドの採掘にも結構熱心である。村の中では現金収入の拡大に熱心に心を配る者の1人であろう。

このように仕事熱心で勤勉な彼の性格は、彼のもう一つの村の中での公的な職業とも関連している。中学校2年まで行き、フランス語も通常の簡単な読み書きができる能力を買われ、彼はトワビンガ郡の郡長の秘書をやっており、それによっても一定の収入を得ている。しかし彼の事業は、カルメやラマザニなど、特にロトコ作りや服装の仕立てで成功している人と比べると、どの仕事をとってもとくに目立った成功を収めてはいない。そしてそのこととともに、子供のいないことは彼の村の中での社会的地位を、その稼ぎにも関わらず低いものにしている。

<クナント>

中層農の下位に評定されたクナントは、年令は41才、妻は1人であるが子供は5人いる。体も強健であり、しかも勤勉である。若い時にはキサングニの町に出て、トラックの助手を勤めたこともあるというが、家族の事情で村に帰ってきた。熱心なプロテスタント教徒であり、日曜日には必ず教会に出かけ、持ち合わせの金を進んで教会に寄進し、教会のための共同作業にも他のものはさておいても参加している。

また農業に関しても極めて意欲的であり、開墾に多くの労力を必要とする原生状態の一次林に村人の平均耕作規模よりもかなり大きな畑を経営し、農作物の販売にも熱心である。しかし現在村の中での収入手段は、農業以外には、しばしば金、ダイヤモンドの採掘に出かけるだけで、他の特定の収入があるわけではなく、また山羊などの財産も全く保有していない。

3) 下層農の世界

<スマイリ>

下層農の上位に評定されたスマイリ(47才)は、妻は1人であるが子供3人であり、8人の子供をもうけたが3人はすでに死に、5人が現存している。一番はじめの娘はすでに嫁に行き、子供もいる。プロテスタントではあるが、自分は世俗的なプロテスタントだといい、かなりの酒のみであ

る。生業は焼畑と狩猟である。しかし狩猟で射止める獲物の数は多くなく、稼ぎも多くない。しばしば妻とともに森に行き、アブラやしの切株から出るボセ⁴⁹⁾という昆虫の幼虫を取り、それを販売している。また、金、ダイヤモンドの採掘にも行くが、もうかなりの年であり、体力もなく、そんなに多くの稼ぎはない。最近は特に腰痛など病気がちであり、あまり仕事ができない。しかし共食集団であるトアの中では最高年令であり、その長としての信望は厚い。

<トワビンガ>

下層農の中の中位に評定されたトワビンガ(48才)は、妻は1人で子供が1人いるが、山羊など威信財は持っていない。焼畑と狩猟で生活を支えており、伝統的な生活を送る人の1人である。村の中で下層農に位置付けられる人にかなり共通したキャラクターであるが、頑張っている生活が高めるといふ勤勉家的なところは薄く、仕事はできるだけ少なめにとすることを身上としている。

金、ダイヤモンドの採掘もしているが強健な体力はなく、長く続けることはできない。村の中で、カソリックに属する人たちは一般によく酒を飲むが、彼もそのような酒のみのカソリックの一人である。取り立てて多くの収入を得ているわけではないが、その収入の多くをロトコの購入にあてている。金はないがロトコを購入した際には、自分だけ飲むようなケチな態度はとらない。借財しても酒を買い、むしろ人にふるまうことを楽しみにして生活している。

<ムコンゴ>

下層農の中の下位に評定されたムコンゴ(56)は、一つの「共食」集団、ムクフェの長であり、村の中では一家をかまえる人物であるが、からきし財産のない人物で、山羊もニワトリももたない。畑は80アールと平均よりも小さいが、たくさん作っても人に取られるばかりだから、できればもう少し少ない方がいいという。このようにまぎれもない貧者であるが、気前のいいところもある。たとえばリボンといわれるやし酒造りである。むらの中では、やし酒造りの<ムコンゴ>としてよく知られているが、彼の熱心な仕事はなによりも自

分が大好きなやし酒を1日もかかさず飲むために続けられており、やし酒が大量にとれば気前よくふるまってもくれる。そして村の中では、何かにつけて話の成り行きをひっくり返すようなトリックスター的な存在で、平等主義的社会のなかに特有の、＜物をためこむということのできない＞人の生き方を体現しているようなところがある。

4.2 富者と貧者の間

1) 「富者像」の二類型

以上のような富者と貧者の具体像をふまえながら、クム社会における「富者」と「貧者」のカテゴリ－の特質を検討するために、ここではまず富者のカテゴリ－中にある富者像の類型とその性格の違いから出発してみよう。

クムにおける富者の一つの類型は、前述のファキ老人にみる例である。とくに大きな現金収入源をもっているわけではないが、山羊などの社会的富を有し、多数の家族や子供に恵まれた生活を送っている。いわば伝統的なタイプの富者であり、ファキ以外にも中年、老年の上層農として認められた者の中に複数見出すことができる。ファキが所有する8頭の山羊の多くは、父系の親族や子供達からの贈与という形でたらされたものであり、現金で購入したものはわずかな数にとどまる。

山羊などの社会的富は婚資として花嫁の父やその親族に贈られるように、さまざまな機会に年長者のもとに蓄積されていく傾向がある。この傾向性について検討するために表8⁵⁰⁾に、年齢層別の山羊保有数を示した。60才以上では55%の者が山羊を保有しており、年長者の多くが数頭の山羊を保有する傾向を認めることができる。しかし、30才未満では70%が山羊を保有しておらず、全体として年少者には山羊を保有している者が少ない傾向を読みとることができる。

しかし表8にも示されているように、全ての老人が山羊を持つ富者であるわけではない。村人の話によれば、老人の中にはたくさんの子供たちに囲まれ、尊敬を集めている者と、単に年をとっているということで敬老される者に区別されるという。そして、前者のタイプの老人は、山羊に代表

表8 年齢と山羊の保有頭数

頭数\年令	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
0 頭	19人 (70%)	31人 (76%)	7人 (54%)	5人 (63%)	5人 (45%)
1	5人 (18%)	3人 (7%)	1人 (8%)	2人 (25%)	1人 (9%)
2		4人 (10%)	3人 (23%)		2人 (18%)
3	2人 (7%)	2人 (5%)			
4	1人 (4%)	1人 (2%)	1人 (8%)		
5			1人 (8%)	1人 (13%)	1人 (9%)
6					1人 (9%)
7					1人 (9%)
合計 100人	27人 (100%)	41人 (100%)	13人 (100%)	8人 (100%)	11人 (100%)

される威信財を保有している場合が多い。ファキの場合は、威信財が年長者に集積していく社会的な傾向性を背景としつつ、特に濃密な人間関係のネットワークをつくり、社会的富を集めているのである。そして中年・老年層で貧者のカテゴリ－に入れられているムコンゴ、スマイリなどとの差異は、まずこの威信財のあるなしにかかわるところが大きい。

もう一つの類型は、青年、中年層に見られる、進取の気性に富んだ、一種の起業家的タイプの新しい富者であり、上述の＜カルメ＞、＜ラマザニ＞の例に当たる。それらの事例には、伝統的な蒸溜酒の製造やミシンによる仕立てなど、農業以外の恒常的な現金収入源を持つという共通の条件を見いだすことができる。このような青年、中年層による起業家型の「富者」の持つ特色は、特に同じ世代の中層農、下層農と比較することによってより明確になってくる。

たとえば上記で見た中層農の下位に位置づけられる＜クナント＞などは、農業に極めて熱心であり、上層農以上に耕作規模も拡大して焼畑経営を行っているが、農作物を市場に売って現金を獲得するしか収入機会がなく、村人の富裕度に関する評定もすでに述べたように中層農の下位にとどまっている。

また青年層によく見られるもので金・ダイヤモンドなどの採鉱で大きな現金収入を獲得し、一時

的に羽振りのいい生活をする者も村人の評価として高い評価はあたえられない。このように、村人がイメージする伝統的タイプとは異なるもう一つの上層農の条件としては、勤勉で仕事熱心であるとともに、年間を通して恒常的に現金収入を得られるような職業を持ち、マネージメントしていくような才覚を有していることが重要となってくる。

2) 富者・貧者関係の様態

(1) 共食集団内部の富者と貧者

オレマ集落における富者の二つのタイプは、富の獲得方法という側面では大きく相異しているが、一方で村の中での富者と貧者の相互の関係性においては共通した側面を有しており、新しいタイプの富者も伝統的なタイプの富者と連続するイメージが認められる。

まず第一に、「気前のいい富者」というクム社会の伝統的な像が今日でも再生産されていることである。例えば結婚や葬儀、あるいは正月などのハレの日に富者は他の人よりたくさんの現金や山羊を提供するものとされている。実際に富者であるラマザニは、「他の者は買えないから」といって山羊を購入し、ハレの日の食事をにぎやかす役割を果たしたし、またもう一つのタイプであるファキも結婚の婚資などに関しては、自分の共食集団であるトアのメンバー以外の若者にも山羊を贈って、その窮地をしばしば救っている。

以上のような「分与のなかに生きる」富者の性格をより明確にしていくために、ここではすでに紹介した富者の中で頂点にあるものとみなされたカルメを取り上げ、さしあたり世帯を越えたレベルで平準化のもっとも強く働くと考えられる、共食集団の内部の成員とカルメの相互の関係性を検討してみよう。

カルメは年は若い、村で有力の稼ぎ頭であり、すぐれた経営能力を持っている。またカルメはオレマ集落の中で、自転車を所有する3人の内の1人であり、着用する衣服にしても、少し品質の良いものが多い。そしてカルメは、「できるだけ新しいことをやっていきたい」というような積極的な生き方の中で、酒造りの技術を取得し、

恒常的な高い所得源を築いてきた。しかしこのような個人的には進取の気性に富む起業家的な能力の反面で、彼が所属する共食集団のメンバーに対して与えている彼の影響力は、ほとんど皆無といえてよい。むしろ他の集団と比較する時、カルメの属する共食集団のメンバーはカルメを除いていずれもきわだった貧者に数えられている。

共食集団内部でのカルメと貧者である他のメンバーたちとの関係は、抜きん出た富者ではあるが、まだ年のいかないこの若者に、他のメンバーが、極めて多くの事柄に関して一方的に依存しているのが実状である。結婚やイニシエーションなどの場では、共食集団のメンバーが中心となって必要な財の調達を計るのが習わしである。そのような機会には、カルメは、共食集団内の極め付けの富者として、山羊などを購入するために必要な資金の多くの部分を負担しなければならない。

一方、カルメは共同生活の中心をなす食事の場面においては、毎日二回、他のメンバーと一緒に同じ食事⁵¹⁾をとる。その食事の際には、彼が町で購入した、少し贅沢な干し魚のマカヤボなどの副食が供され、そこでは自分では買えない他のメンバーにも平等に分かたれてともに食されるのである。平準化の機構を供えたクム人の共食集団の中では、富者は貧者を一方的に支える機能を果たすことになる。

このような貧者が富者に一方的にたよる傾向性はカルメ以外の共食集団の中でも認めることができるものである。そしてこの富者と貧者の関係性の中では、勤勉で突出した富者が共食集団の中にいればいるほどそれ以外の他のメンバーは、それに即応するかのように依存関係を作り上げ、貧者の世界を享受することになる。

表9⁵²⁾は、以上のような「共食」集団の内部の富者と貧者の関係性のあり方をオレマ全体の共食集団間の比較を通して示そうとしたものである。オレマの中にある14の共食集団全体にわたる傾向性は富者がある共食集団の中だけに集まったり、逆に貧者だけがある共食集団に集まったりすることなく、概ね、富者と貧者がバランスよくそれぞれの共食集団の中に、組み込まれていることであ

表9 農民の差異化と共食集団

共食集団 ランク	Osukwanjali				Osukwanbime					Osukwanbegale		Osukwanbina			
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	1	1	2	3	4
上位		*	*	*		*		*					*		
上層															
中位			*						*		*				
農															
下位	*														
上位	*	*	*		*	*			*	*	*		*	*	*
中層	*														
中位		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
農					*					*	*		*	*	*
下位				*	*										
上位	*	*													
下層	*														
中位	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
農		*	*		*	*			*	*		*	*	*	*
下位			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

1) Osukwanbigale, Osukwanbime, Osukwanbegale, Osukwanbinaの下に付された番号がオレマの共食集団を示す。この番号は、表2と対応している。

2) *記号一つが各共食集団内部の一世代に対応し、類別されたランクの位置に付されている。

る⁵³⁾。それは、富者と貧者の相互の関係性のあり方が平準化のなされる共食集団を一つの単位としてそこでセットとなって展開していることを示すものであり、「平準化の中の差異化」という現象がまさにそこに現出しているのである。

(2) 社会の再生産とクム人の富者像

この差異化現象のもう一つの特徴は、それが物的な生産関係の帰結というよりは、むしろ社会の再生産にかかわる側面に根ざしている点にある。山羊に象徴される威信財は、婚資としての社会的機能と深く結びついており、その多寡は物的生産の手段や財の蓄積量によるものではなく、人間関係の処理能力や世帯の規模に見られる富者と貧者の差異を示しているのである。

実際に富者とみなされる者の多くは複数の妻を持っており、子供や親族に恵まれているというこ

とである。ファキを除く「伝統型の富者」はいずれも複数の妻を持ち、カルメやラマザニも2人の妻を持っている。クム人の中で富者と目される人たちは共通して、妻子や肉親など通常の扶養家族と考えられる者に加えて、直系親族以外の被扶養者を抱えている。たとえばオレマ村の中で、ファキには12人の被扶養者がおり、若いカルメやラマザニもそれぞれ自分の直接の扶養家族以外に4、5人の被扶養者を抱えている。

この〈被扶養者〉のカテゴリーに含まれる者は、親が死んでいない子供や妻に先立たれた老人、また未亡人などいわば独力で生活を維持していくことが困難な者がその多数を占める。その中で年少者を引き受けたような場合は、いわば親代わりとして、成人し、結婚するまで面倒を見ることになる。現代の富者は傍系親族員の扶養を通して、村

内での社会的生産に重要な役割を果たしているのである。

このような扶養者と被扶養者の関係は⁵⁴⁾、さしあたり日本の「家」社会の中に見られたような労働組織としての位置づけを第一義とするものではない。その関係は固定的、永続的なものではなく、後述するように、生活の困難を避けるための一時的な場合が一般的であり、年少者ならば結婚し独立すればその関係は解消する。また日常生活の中では、ある世帯に受け入れられた被扶養者も「共食」の場を通してより広い集団成員によって支えられており、被扶養者を多数受け入れたからといってその労働者数に応じてその世帯の経営規模が拡大するわけではない。このことは表5において見たような世帯間の経営規模の多寡の少なさの中にも現れているということができよう。

表10⁵⁵⁾はオレマ村のインフォーマントの回答をもとに農家の階層と被扶養者数の関係を分析した結果を示している。被扶養者を抱えるインフォーマントは全体の29%を占め、被扶養者は、最高の9人から1人まで大きな差異が存在している。上層農の3分の2は、何らかのかたちで、直系の親族以外のものを扶養義務として抱えており、平均

して3～6人の被扶養者をもつものが多いが、中には9人の被扶養者をもつものもある。これに対して中層農になると68%は被扶養者をもたず、さらに下層農に位置づけられる人になると80%の者が自分達の直系親族だけで生活している。被扶養者をかかえる場合でも中層農や下層農では少数の被扶養者にとどまる場合が多い。

一方金やダイヤモンドなどの採掘により、若者が一時的に大量の現金を獲得することもあるが、家族を持たないこれらの独身の若者を富者とは見なさず、むしろかなり低い地位の貧者と考えている。

村人が類別する富者と貧者のカテゴリーには、「何かをどれだけ持つ」ということよりも、むしろ「貧者に対してどれだけ分けられる能力があるか」、あるいは「多くの世帯員を支えていく能力があるか」という視点が大きく介在していると考えられる。

4.3 富者・貧者関係の動態とその性格

以上のようにクム人の農村社会では、富者と貧者の間には、平準化の中の差異化という伝統的な富者と貧者の関係が再生産されている。ここではこのような分与の経済を機軸としたクム社会における富者—貧者関係が、今日の農民経済の動態の中でいかなるかたちで変容し再編されているのか検討しておきたい。

オレマ集落の中には、個々の世帯がかかわる三つのレベルの異質な財の交換の場が存在する。第一は自給的な生活の底辺をなす共食の活動やその共食集団内部での経済活動である。第二は、冠婚葬祭など大きな出費を必要とする活動である。第三は村の外部、異なるエスニックグループの商人との間で農産物を販売し、日常消費財を購入する現金経済である。

この中で第一番目のレベルに関しては、クム人の中では、いまなお伝統的な「共食」が保持されており、その範囲ではたくさん作物を作ったものが少ない者に分与する原則が維持されている。第二番目のレベルに関しても様々な相互扶助がなされており、出費のかさむ冠婚葬祭時などには、富

表10 農家の階層と被扶養者数

階層 被扶養者数	上層農 9人	中層農 38人	下層農 50人
0人	3人(33%)	26人(68%)	40人(80%)
1		7人(18%)	5人(10%)
2	1人(11%)	2人(5%)	2人(4%)
3		1人(3%)	
4	2人(22%)	2人(5%)	2人(4%)
5	1人(11%)		1人(2%)
6	1人(11%)		
7			
8			
9	1人(11%)		

者が貧者よりも大きな負担をしている。これに対して第三番目のレベルは、基本的に世帯が単位となり、現金経済にかかわる領域である。もちろん日常生活の中では、現金で買ってきたものでも、たとえば石鹼のような場合には、持っている人が持っていない人に貸すのが当然というかたちで分有されていく。

しかし現金は、他の財と比べて基本的に極度に分有されにくいものであり、そこに生じる差異は、伝統的な「共食」の場や第二のレベルの平準化のメカニズムでは対処できないものを含んでいる。このような現金をめぐる富者と貧者の問題を考える上で、興味深いことはすでに見てきた富者の二類型と貧者の間に見られる対応関係の差異である。

伝統的タイプの富者の場合においては、山羊などの、富者が保有する社会的富も基本的には贈与という過程を介して蓄積されていくものであり、それらを保有する富者の側でも様々な必要に応じてそれらを保有しない者に贈与するべきと考えられているのである。それゆえ、このような伝統的タイプの富者と貧者をつなぐ関係性は安定しており、貧者は、このタイプの富者を高く評価する。

これに対して、富者のもう一つの類型である起業家の富者の場合は、村の中での社会交渉をこのような分与の経済の倫理に任せることはできず、むしろしばしばそのような規範を断って、販売やサービスを通して富を蓄積していかなければならない。そして様々な場合において、彼らは村の中の貧者とのあいだで利害を対立させることになる。実際ロトコ⁵⁶⁾などの販売においては様々な諍いが絶えない。販売する側は、支払いの遅れたロトコの代金をビジネスライクに要求するが、支払えない貧者は、「富者である者が、現金を払えない者から取り立てるのはよくない」と伝統的な倫理を盾にとり抗議する。このような過程が起こるのは、富者が貧者に分与すべきという倫理が今なお多くの農民に受け入れられているからといってよいだろう。

しかし、このような伝統的な倫理を持ち出す「貧者」の抵抗も部分的に許容されるにすぎず、サーリンズのいう「均衡的」⁵⁷⁾な互酬性に基づく

交換の論理は、現金経済のやりとりに関する限り、広く村全体を覆いつつある。

今日クム社会の中で、現金が深く関与する生活領域は、第二章で見たような生活消費財と、学校や医療などの近代的サービスに関する領域である。石鹼、灯油、煙草、砂糖などの商品は、必需品になり始めており、また通常の病気の薬代や医療費はなくてはならない必要経費である。とりわけ日々値段が上昇していくようなインフレーションの中では、現金を獲得していくことの重要性は極めて高まっていると言えるだろう。

しかし、このような現金経済の流入に対する個々の世帯の適応能力は、収入の差異の項で見てきたように、かなり異なっている。それゆえ世帯間ごとに現金使用にもかなりの差異が見られる。特に夫夫妻のどちらかを欠いた欠損世帯や両親のいない子供、高齢者の場合は、相互の援助が得にくい現金世界での欠乏ゆえに、その負担は個々の世帯に直接襲ってくることになる。このような世帯間の差異化を押し進める商品経済化の流れ中で重要な役割を果たし始めているのが、前章でみたような富者による「扶養」の形態である。

この典型的な事例は、新しいタイプの富者であるラマザニと被扶養者の関係の中に認められる。ラマザニがかかえる被扶養者の一人は、同じ共食集団のメンバーであるボカボカの一番年下の13才になる弟である。ラマザニがこの子供を世帯に引き取って面倒を見るようになった契機は、この子供の父親が死んだ時である。誰が引き取るのかという議論がトア（共食集団）の中で繰り返し合われ、最終的にラマザニが引き取るようになった。

ラマザニとこの被扶養者は、ふた従兄弟の関係にあり、共食集団内系譜関係は特に近いわけではない。系譜的にはボカボカが扶養すべきであり、そうでない場合も系譜関係の近い者はたくさんいるが、結局、「トア（共食集団）の中で一番余裕のあるラマザニが面倒を見た方がいい」ということになり、ラマザニ自身もそれを受け入れたという。そしてもう1人の被扶養者も年少の男子で、系譜的にはさらに遠い関係にあったが、同じ経緯

でラマザニが扶養している。

このラマザニと被扶養者の関係は、養父とその子供という関係として結ばれており、日常生活の中でラマザニの畑仕事を手伝うこともあるが、それは通常の子供が行う手伝いであり、ましてやラマザニが子供達を自分の生産の拡大のための労働力として考えているわけではない。ラマザニにとってこのような子供を引き取ることは「将来の学資や結婚資金の調達などを考えれば大変重荷になる」ことではあるが、トア（共食集団）の中で、現金収入を定期的に稼ぎ出す能力をもった唯一の富者である自分の立場を考えると「自分がなんとかしなければならない」と思い、むしろその時点では積極的な気持ちになって引き取ったのである。子供達をラマザニに預けた共食集団の他のメンバーから期待されていることも、子供の親代わりとして学資や治療費などを肩代わりし、生活能力のない子供が結婚して独立するまで育てることにあるといってよいだろう。

ここには、扶養関係を媒介とした現金の平準化あるいは共有化という側面をみることができる。親が死んでいない子供や妻に先立たれた老人などを近親者が扶養することは伝統的には、年長者がリネージュシステムの中での役割として引き受けるものであった。しかし今日、ある世帯がある子供を引き取ることは、その子供の養育に必要な現金支出をも負担することを意味している。それゆえ、親族の役割として扶養者となることが期待されても、貧しい世帯では困窮者を扶養することはできず、リネージュ内の富者が被扶養者を抱える傾向性が生まれてきているのである。

食の提供や山羊などの社会的富の贈与などの互酬的關係は、共食集団という狭い生活集団の内部に限定されながら適用される。しかしこの扶養関係は、そのような範囲を越え、より広い地域社会をベースとして貧者が富者のところに滞留する可能性を持つことである。実際にオレマ集落の事例の中でも、村から他出した者の親族や遠縁の者など共食集団に含まれる成員以外の者が、ある世帯の被扶養者となり、共食の場に参加している。都市域に近いクムの集落と比較すると、ここでの調

査地であるオレマ集落においては、このような事例は今のところかならずしも多くはない。しかし、さらに集落の内部での商品化と世帯の単位化が進み、地域的な富の偏在が生み出されるようになれば、平準化を確保していくうえで、このような共食集団の単位を越えた個々の富者と貧者を結ぶ扶養関係の重要性はさらに高まっていくと考えられる。

富者のところに人が集まり、富者が多くの成員を抱える状況は、その内部の富者と貧者の具体的な関係に立ち入らず、その現象を個別の財とランクの関係からとらえるかぎり、世界システム論に依拠する論者が主張する、アフリカの農村への資本主義の浸透や階層分化を追認する現象のようにも見える。しかしクム社会の中の富者—貧者の生成のプロセスは、以上見てきたように、その中で生産手段の差異が拡大していくような「支配関係」の確立過程ではなく、今日でも、その過程で常に富者から貧者に財が流れる「分与の関係」と威信財に起源を持つ独特の富の構造に支えられて展開しているのである。

5. 結 語

クム社会における富者—貧者関係の検討を踏まえて、ここでは冒頭の問題提起に立ち戻りながら、アフリカ農民社会における今日の動態とその中で農民間の「階層化」についてのこれまでの論議を再検討してまとめとしたい。アフリカ農民の「情の経済」を強調するゴラン・ハイデンに対して、カスファーをはじめ多くの論者が鋭い論難を突きつけたように、アフリカ農民社会の中にも、何らかの構造的な差異化を伴う階層現象は世界システムとの連関の中で拡大している。その中には明確な農業の経営規模の差異をとまなうものもあり、たとえばタンザニアにおけるイリング⁵⁸⁾などにおいては、クラークと呼ばれる富農層の出現が見られ、階層現象との関係が指摘されてきた。

このような事例と比較すれば、クムの事例は、はるかに階層現象の僅少な地域の事例であることを示している。しかし、このようなクム社会にお

いても、商品経済の浸透にともなって生活集団内部での分節化が進み、世帯単位での経済の重要性が増し、階層現象の基盤を作りつつある。それゆえここでのクムの事例は、平準化機構が強く働く地域社会の階層化現象を取り出すことによって、アフリカ内部で進行しつつある階層化現象の展開の普遍的な展開を例示しているといっていよい。

しかし同時に平準化機構をはっきりと残したクム社会の検討の中から明らかになったことは、アフリカの階層現象の中で指摘されてきた＜平等主義の中の差異化＞＜平準化の中の差異化＞という文化的特性が地域社会の動態の中にいかに現れ、さらにはそれが伝統的社会が持っていた階層現象のあり方といかなる意味で連続し、いかなる意味で非連続なのかという点である。

第四章で分析したように、クム社会の中での富者と貧者の間には分与の経済が維持され、富者と貧者の相互の関係性が分ける・分けられるという構造の中で展開し、その関係は短期的で流動的である。この分与の経済と農民間のランクとの関係は、ここで検討したように、伝統的社会の中での共食や社会的富の分与というかたちでの関係だけではなく、今日の現金経済が流入する中でも富者の扶養義務というようなかたちで再生産している。

このようにクム社会の中の富者－貧者関係をめぐる動態は、富者と貧者にそれぞれ現れるいわば可視的な生産や所得や社会的富の今日の動態だけでなく、その間に新たに展開する分与の経済の動態に着目することにより、アフリカの農村を舞台に繰り広げられてきた差異化と平準化の断面に一つの構造的な連関をみることができるとを示唆している。このような側面は、アフリカ農民経済の動態論の中でその検討が欠落してきた領域であり、このことをまずここで確認しなければならないだろう。

そして以上のようにクム農民の階層現象の内部に踏み込んで分析した結果、これまでアフリカ農民の階層化に関する議論に欠落していた領域が、階層現象の質にかかわる問題として以下の二つのレベルで明らかになってきたといえるだろう。

第一点はこれまでの農民経済の動態に関する研

究、とりわけ経済学的研究の多くが、農業生産の場に一義的な階層の論拠を求め、消費構造に踏み込んだ研究を行なってこなかったことである。このような研究視点の偏向は、農民層分解論に見られるような、物的生産を一義的に重視する、従来のマルクス主義的パラダイムに根ざしている⁵⁹⁾と考えられる。そのようなパラダイム自身がメイヤースなどの諸論稿に見られるように、アフリカ農民経済の研究を媒介としながら再検討されつつあることを念頭に置く必要があるだろう。

第二点は、上記の視点に対して、アフリカの農民の経済を内側から描き出そうとしてきた経済人類学、あるいは日本での生態人類学に内在する問題である。日本によるアフリカの農民経済に関する研究では、掛谷などの研究の中にすぐれた成果を見てきたが、そこでは平等主義、あるいは平準化現象の解明に研究対象が終始し、平準化の中の差異化、平等主義社会の中の富の偏在という現象に対する問題視点が主題化されてこなかったことである。しかしアフリカ的な意味での富者・貧者の関係のあり方とその様態に踏み込む研究を欠くことは、その結果として、多層なかたちで変化する平準化の動態を内部から具体的に検討する道を閉ざすことになりかねないという問題を生じさせていると考えられる。

このような階層状況にかかわる文化論は、すでに東南アジアなどでは、パトロークライアントの文化的性格に関する議論の中で、モラルエコノミー論として長い論争史をもつ⁶⁰⁾。گران・ハイデンの「情の経済」に関する議論もこれらの研究動向と連関していると見てよい。しかしクム社会の分析によって明らかになったように、アフリカにおける階層状況の文化論は、東南アジアを対象としたギアツなどのモラルエコノミー論には収まらない視角からの検討を強く要請していることも同時に確認しておかなければならない。

クム社会における階層状況の特性は、東南アジアにおけるパトロークライアントの関係と対比して、生産手段の保有の差異に関わる部分が極めて少なく、「貧困の共有」の次元が異なるように見えることである。このような意味で、アフリカ

の農民のモラル・エコノミー論は、先行する東南アジアのすぐれたモラル・エコノミー論をも相対化していく必要があろう。

もちろんこのようなアフリカにおける、「平等主義の中の差異化」という状況の分析を実態に即して深化させていくためには、農民経済の次元での「富者—貧者」関係だけでなく、心理現象にかかわる、よりミクロなレベルでの平準化の機構や村落をこえた都市化現象の中で発現する「情の経済」などのマクロなレベルでの分析が必要であろう。同時に、アフリカ内部の地域差や市場経済の浸透の差異を考慮した比較の視点が重要になってこよう。たとえば筆者が現在研究をすすめているタンザニアの農村世界の中では、クム社会でみたような「共食」の単位はすでに解体するか縮小しており、それゆえその中での富者と貧者の関係や平準化の機能にも大きな差異が予想される。これらの比較のための具体的な事例研究も含めて、アフリカ農民経済の動態の個別性と普遍性に関わる議論は、今後研究の進展の中で稿を改めて検討したい。

謝 辞

本研究のもとになった資料は、科学研究費補助金（国際学術研究）による1986年の「赤道アフリカにおける伝統農業の技術・経済・社会の構造」（代表：坂本慶一 京大立大学学長、当時京都大学農学部教授）、及び1989年、1990年、1991年の「アフリカ・イスラームにおける都市—農村関係の動態比較」（代表：米山俊直 放送大学教授、当時京都大学総合人間学部教授）のプロジェクトに参加して得たものである。調査を行うにあたって研究代表者であった坂本慶一先生、米山俊直先生には多くの御指導と助言をいただいた。ザイール国においてはキサンガニ大学のバヤ教授、キンシャサの芸術高等専門学校の講師コンゴロ氏をはじめ、多くの方々に御協力をいただいた。また研究のまとめにあたっては特に京都大学アフリカ地域センターの掛谷教授から多くの助言をいただいた。また霊長類研究所 Michael A. Huffman 氏にも英

文の校閲などにおいて協力をいただいた。記して感謝します。

註

- 1) ハイデンは以下の著作、論文の中でアフリカ農民経済の特質を“情の経済”という概念でとらえ、資本の論理よりも、家族、親族関係が優先される農民の行動倫理を指摘している。
Hyden, 1980, 1983, 1986, 1987
- 2) 日本の中では、以下のような一連の業績がこのような立場からすぐれた成果を生み出している。
児玉谷, 1984, 1985
池野, 1988
- 3) アフリカ社会の平等主義に関する研究は日本の中ではとくに京都大学を中心とした生態人類学的研究のなかで、狩猟・採集、牧畜、農耕などの異なる生活様式を横断するかたちで質量ともにすぐれた成果を生み出している。しかしそれらの研究の多くは、「平等主義」の原像を追うことに一義的な目的が置かれ、「平等主義社会」の動態、文化変容への関心は著しく欠落してきた。このような研究上の偏りは、アフリカ社会の動態研究を中心にしてきた社会経済研究との間に、現代のアフリカ社会像をめぐって大きな乖離を生み出している。
- 4) アフリカ農民経済の動態的側面を扱う研究の中で「階層化」や「階層化の状況」を検討してきた研究は、マルクス経済学的手法をとる研究などのなかに頻繁に見られるが、地域的に展開する「階層状況」の質的な差異を主題とした分析的研究はほとんどみられない。一方、文化人類学的研究のように農民経済のミクロな状況にかかわる研究においては、アフリカにおける農民の階層化の状況をアフリカ以外の他地域社会と通文化的に比較する視角を欠落させてきた。上述のハイデンの論点がアフリカ農民経済の動態的研究において大きな論争視点を作り出してきたのは、このような研究上の空隙を荒削りながらも指摘したからだといえるだろう。
- 5) アフリカの農耕社会における「土地保有」の性格は、歴史の過程の中で、アフリカにひろく展開する焼畑経営の方式と密接に関連しながら維持され、赤羽が次に指摘するような他の低開発地域と異なるアフリカ社会の特質を形作っている。
「ところで通常、世界の低開発地域はアジア、アフリカ、ラテン・アメリカと地理的常識にしたがって三分類されるのが一般化しているが、この分類法は、アフリカをサハラ砂漠以南のブラック・アフリカに限定することによってある種の科学的根拠をもつように思われる。というのは、低開発経済の質的側面を表示する土地占取様式がこの三地域においてそれぞれ特徴的に異なっているからである。いまここで、これを国連の『農地改革の進展に関する報告』に使われている用語によって非常におおまかに類型化すると、まず、アジアは「地主=小作関係」landlord-tenant relationship—「領主=隷農関係」を含む—の支配的な地域であり、ラテン・アメリカ

は、「プランテーション・システム」large estate, latifundia の優越的な地帯であるのに対し、ブラック・アフリカは「部族共同体的土地占有」communal tenant によって特徴づけられることになる—この分類によれば、サハラ以北のアラブ・アフリカはアジア型に入ることになるであろう。そして、前者、すなわちアジア型、ラテン・アメリカ型は、それぞれ方向は異なるものの、いずれもブラック・アフリカ型からある種の発展をとげたものと考えられるのである。」(赤羽, 1971: 72)

赤羽のいう、「部族的共同体的土地占有」とは、個人から大家族、リネージ、クランに至る入れ子状の血縁集団によって重層的に占有されたものであり、通常、大家族によって占有された土地にも独占的な処分権はなく、上位の集団である、リネージやクランによる処分権への制約がある。今日では土地保有主体は制度的には国家にあり、また地域的には現金で売買されることもある。しかし一般的には土地の慣行的な共同体的保有形態は維持され、購入される場合にも、必ずしも高いものではなく、使用されたあと放棄される場合も珍しくない。このような土地保有と農民の関係は、第三世界のなかでも「水田」という農耕システムと深く結び付いて土地が財の中心にすえられている。アジア的世界と比較する時、今日でも明らかにアフリカ農民社会の独自の性格を作り出しているといえるだろう。

6) 掛谷, 1994

7) 江口の論文の主要な目的は氏自身が述べるように、カリブ海の農民社会に関する先行研究において自明となってきた農民間の均質的、平等的、静態的行動特性を農民の内部の視点から再検討することにある。

江口, 1985: 339

8) 江口の研究に対して本稿が目的とするものは、非平等であるかないかということをはっきりとすることが一義的な目的ではなく、非平等、差異化の内的構造、その文化的特質を、農民にとっての「富者」「貧者」のカテゴリーとは何かという視点から検討していくことにある。特にその間の関係性のあり方としてとらえていくことにある。これはカリブ海でアトム化した世帯を想定して分析する江口と、大家族などが集団として実体的な意味を持ち、アトム化しえない「世帯」を前提としてアフリカ農民社会の差異化の様態を検討することが必要となる本稿における農民経済の分析視点との違いでもある。

9) サーリンズは『石器時代の経済学』の中で、「互酬性と富」「互酬性と食物」をめぐってこの問題を中心に論じており、その中でサーリンズは「食物」と「食物以外」の財の性質の差異を強調し、富の偏在が後者の中で起こることを指摘している。

サーリンズ, 1984: 256-268

10) サーリンズが「食物と互酬性」の項でとらえたように、他の財と比較して「食物」の分配は社会関係の再生産にもっとも大きな機能を果たした。

サーリンズ, 1984: 262-268

11) 児玉谷, 1993

12) とくに“Beyond ujamaa”の中で展開しているアフリカ農民の特性に関する記述は、他の地域社会

と比較した時のアフリカ社会の特質をきわめて明確に提示している。しかしゴラン＝ハイデン自身の研究は、政治経済領域でのマクロな研究に留まるものであり、農民経済の内的構造に関する研究は展開されていない。

Hyden, 1980

13) 都市化現象の中で指摘されている都市のなかの再部族化現象は、このような「情の経済」の再生産を示唆するものである。ケニア・ナイロビの都市コロニーにおけるマラゴリ人についての松田による研究などを参照せよ。

松田, 1983

14) 今日の第三世界における農民経済研究、さらには日本における小農研究においてもその考察のモデルになってきたものはチャヤーノフの小農理論に提示された農民経済のモデルである。杉浦はチャヤーノフの『小農経済の原理』の日本への翻訳書の解説の中でチャヤーノフのいう「農民経済」の含意する意味内容について次のように述べている。

『農民経済(Bauernwirtschaft)をもって、「家族の労働的および消費的経済(Familienarbeits- und verbranchwirtschaft)」と定義している。すなわち彼の研究では、家族の生産と消費、あるいはまた業務と家計とを分離することなく、両者を不可分な有機的全体として取り扱っている。思うに我が国のいわゆる「農家経済」なる語は無意識にもせよもっともこれを表現するものであろう。』

本論文における「農民経済」も、このような生産と消費の結合体としての農民家族経済を念頭に置いたものである。

チャヤーノフ, 1927: 9

15) 末原が指摘するように、アフリカの農業生産では、核家族ではなくて大家族、大家族よりさらに大きいリネージが生産の単位となっていることもあり、また核家族、リネージがそれぞれ土地利用の単位や労働の単位として重層的に機能しており、どれを生産の単位として確定すればいいのか判断しがたい場合が多い。ましてや、消費経済をも含めて小農経済の単位性を検討しようとするならば、世帯間、大家族間の互酬的な経済行為がその間に引かれる境界を極めてあいまいなものにしているといっていよう。

16) このような重層構造をもった農民経済は、ただちにその全体を把握することはできず、その経済の分析においてはさしあたりその部分から検討を加え、その全体に迫って行かなければならない。それゆえそのような意味では、これまでのこの地域での先行研究がしばしば試みてきたように、世帯を「農家」になぞらえて、その単位性のもとにこの地域の経済を論ずることも、本稿で検討するような現金生活との関係では、あながち意味がないわけではない。

しかし上記のことと世帯を大家族と切り離しておこなう分析がアフリカ農村の「世帯」の分析として必要十分であることは別の問題である。特に分析用具の普遍性を主張する経済学の立場からの分析が、階層論に置いても先進国社会で作られたモデルでアフリカの農民経済をそのまま分析することは、

- 人類学などの内部から農民経済を把握しようとする視座との間に大きな乖離を生み出してきたが、しかし人類学の中の経済研究の中にもこのような分析用具としての〈世帯〉の単位を実体化し、その単位性を自明とする研究が一般に多く認められる。
- 17) 杉村, 1987
 - 18) 武内, 1993
 - 19) 1980年代の初頭からキサンガニ周辺地域では金、ダイヤモンドの採掘が許可され、砂金や工業用ダイヤモンドを中心に農民による採掘が行われている。
 - 20) クム農村の中での農民による相互扶助の伝統は今日でも維持されており、大きな突然の出費にかかわるような場合は親族の援助によって支えられる。しかし日常的な出費の多くは世帯で賄うのが一般的である。
 - 21) クム人の親族は父系制の単系出自であり、父方居住を原則としている。
 - 22) 杉村, 1994
 - 23) リネージと「共食」集団の関係の詳細な検討については別稿を予定している。
 - 24) しかし実際の生活の中では「共食」するメンバーの関係も閉じられたものではない。村人との話によれば、「村の女たちが、バラザに食事を毎日二回運ぶことは、義務であると共に、食事の時間にバラザ(集会所)に集まった人は、たとえ通りすがりの人でもそこに参加することを拒否してはいけない。」といい、食事の共同性と平等性が強調される。
杉村, 1994: 500
 - 25) このような血縁的社会集団に対して、ムエニャガンジャという成人儀礼によって組織された年齢集団が、結婚や葬式などの重要な通過儀礼において大きな役割を果たすが、さしあたり日常的な生計活動には大きな意味は持たない。
 - 26) Mahieu, 1985: 4
 - 27) クム以外でもザイルの熱帯雨林下の農民経済を対象としたモノグラフの中には、生活のレベルでの農民間の同質性が描かれている。
 - 28) オレマ村での階層状況についての調査は1990年10月から11月にかけて行われた。
 - 29) 人によっては、「どのような基準で分けるんだね」「お金についての富者かどうかをいうのか」など様々な混乱が生じる場合もあるが、たいしては一定の熟慮の後、一気に分けてくれる。そして結果として出てくる「富者」と「貧者」の分類内容は極めて近似した場合が多かった。このような富者—貧者の差異化に関する住民の高い関心と分析結果の確かさや共通性がこの研究の出発となっている。
 - 30) 上層、中層、下層の大分類のレベルでは、3人の意見に大きな差異はなかったが、三つのランク内での下位分類では、3人の意見には、20例ほどのずれが見られ、それが大分類の境界域での分類の差異にもつながったので、3人の間で意見の調整を図った。とくにA氏と他の2人の間に意見のずれが多かったので、共通する2人の意見を中心にしながら、それにA氏の意見を加味する形で、妥協点を見いだし、表3のようなオレマ集落のランキングを作成した。
 - 31) この研究に関する予備的調査は1986年に行われ、本調査は1990年の秋に行われた。
 - 32) 伊谷, 1989: 418-419
 - 33) 末原, 1990
 - 34) 例えば村の中での諍いでAがBを傷付けたような場合、Aの家族がBの家族に調停の贈り物をして処理されることが多いが、この時にしばしば送られるのが社会的富としての山羊である。
 - 35) クムにおける伝統的な貨幣はモソロと言われ、ナイフ状の小貨幣と壺状の2種類の大貨幣が存在した。
 - 36) オレマ村の特に老人層からの聞き取りの中で、このような子供に対する高い価値評価が示された。
 - 37) 村人の意識する財産項目は、村ごとにかんがりの差異があり、とくに商品化のレベルと連関した違いが明瞭である。オレマ村では「現金」に対する財の意識は薄い。商品化の進んだ村では、「現金」は資本として大きな意味を持っている。村人の伝承では山羊はアラブ人によって導入されたといわれるが、その真偽は、今のところ明瞭ではない。
 - 38) 今日のクム農村の中では山羊の所有は一般に個々の世帯に帰属するものとして理解されているが、なかには自分の所有する山羊の数に言及した後でも、その山羊が自分のものというよりは拡大家族のものだとつけ加える者もいる。
 - 39) 各ランクの基準となる指標について、101人の被調査者の内で、正確な数値をえた被調査者数に差異が存在する。耕地、山羊については、かなり客観的な数値を得ることができたが、収入に関しては不正確なものが多い。収入に関しては、ザイル経済全体の激しいインフレーションにより、農民から明確な額を聞き出すことが極めて困難な上に、回答を拒否するものもかなりみられ、ここでは、被調査者のうち、約半数の明確な回答を行なったインフォーマントの回答について検討している。1990年の秋の調査時点で見ると、農民の収入の中には90万ザイルという極めて高額な収入を得るものから一万ザイルに満たないものまで、かなりの差異が存在する。
 - 40) オレマの成員のうち農民間の階層のランクと耕地の経営規模が同時に把握できた88人についてその相関関係を示したものである。ザイルの中では末原が調査した東ザイルのテンボ、バシなどでは経営規模と農民間のランクの関係性が指摘されているが、クムの中ではそのような現象は今のところほとんど展開していない。
 - 41) 表6は、オレマの成員のうち、農民間の階層ランクとそれぞれの収入を同時に同定のできた52人についてその相関関係を示したものである。
 - 42) とくに金、ダイヤモンドの採掘は、若者を中心にして一時的に多くの現金を獲得する機会を与えているが、このような〈恒常性〉を欠く収入は、農民間のランクの指標として低い評価しか与えられず、金、ダイヤモンドで多くの収入を得ても、そのほとんどは下層農民に位置づけられている。
 - 43) 表7は、オレマの成員のうち、農民間の階層ランクとそれぞれの保有する山羊の数を同時に同定のできた96人についてその相関関係を示したものである。
 - 44) 治療代など突然の出費が必要になった時、今日では、畑を抵当にして現金を確保する時もあり、社会

- 的处理能力を有する「富」である。通常山羊などの社会的富を持たない農民は、自らの富として“畑”を第一番目の財産項目に上げる場合が多い。
- 45) 末原は、テンボの事例の中で次のように述べている。
「経済的にみれば、ものを手にいれるために貨幣を用いることはほとんどなく、贈与や、相互扶助が、経済関係の基本的な原理となっている。たとえば、共同体の内部では食糧は売買の対象にならないものと考えられている。食糧は自分で生産するか、共同体の外部から買ってくるか、贈与されるか、配分されるかするものであって、貨幣によって売買されるものではない」末原, 1990: 325
- 46) 村の中で作られるロトコは、街で売られることもあるが、そのほとんどは地域内で消費されている。
- 47) オレマ村の中でイスラームはファキ1人であり、それ以外の人は、キリスト教を信仰しており、この地域ではカソリック系、プロテスタント系、キンバングスト系の三つの宗派が存在する。キンバングスト系は、ザイールのメシアの宗教指導者キンバングによって創始されたもので、コンゴ族の土着宗教とキリスト教が融合されている。
- 48) クム人が信仰するキリスト教の宗派の中で、プロテスタント、キンバングストは飲酒を禁止しており、一方カソリックは認めている。
- 49) アブラヤシを倒した幹の髄が腐敗すると、これにアフリカオオゾウムシの幼虫が発生する。これを現地名でボセという副食として賞味する。
安溪, 1981: 151
- 50) 表8は、オレマの成員のうち山羊の保有数と年齢がともに確認できた100人について作表し、その傾向性を示したものである。
- 51) 少なくとも毎日二回の共食の場では、共食集団内部のメンバーは同一の食事をとる。食事内容の差異はむしろ「共食」集団間に生じ、一般にメンバーの多い共食集団は、一種の「規模」の経済によって豊富なメニューの食事をとっている。
- 52) 表9は、オレマの成員のうち農民間のランクを明確に確認することのできた101人について、その帰属する共食集団とその富者-貧者間のあり方を取り出したものである。
- 53) クム人の富者・貧者の関係の中には、掛谷がタンザニアのトンゲヤベンバ社会で検討した「呪い」をめぐる人間関係のような心理的次元で富者が貧者を「恐れる」関係性があり、クム社会において富者が貧者に分与することを当然とする関係性を作り出している。
- 54) 表10は、オレマの成員のうち、農民間の階層ランクとそれぞれのかかえる被扶養者数を同定できた人についてその相関関係を示したものである。
- 55) 福田, 1992, 133-145
- 56) 吉田, 1985
- 57) 第三章第一節でのラマザニについての記述でも述べたように、ミシンによる仕立てをしても親族からは代金を請求しにくい状況がある。
- 58) サーリンズは「未開社会」の交換様式として以下の三つに分類している。

- 1) 一般的互酬性 (Generalized reciprocity)
- 2) 均衡的互酬性 (Balanced reciprocity)
- 3) 否定的互酬性 (Negative reciprocity)

一般的な互酬が分与するものからされるものへの一方的な分与であるのに対して、均衡的な互酬性とはいわばgive and takeの関係に立つ交換様式である。

59) メイヤース, 1977

60) 原, 1985, Geerts, 1963

参考文献

- 赤羽裕, 1971.『低開発経済分析序説』岩波書店。
- Allen, W., 1965. *The African Husbandman*, Edinburgh, Oliver & Boyd.
- Amin, S., 1967. *Le developpment du capitalisme en Cote d'Ivoire*, Edition de Minuit, Paris.
- Amin, S., 1974. *Accumulation on a world scale, A Critic of the Theory of Underdevelopment*, Monthly Review press, New York.
- Armstrong, W.R., 1985. "Dependance Alimentaire et Urbanization developpement des Ressources Alimentaires," *Revue Tiers Monde* XXVI.
- 安溪遊地, 1981.「ソングーラ族の農耕生活と経済活動ー中央アフリカ熱帯降雨林下の焼畑農耕」『季刊人類学 12-1』。
- Banque du Zaire, 1975-1990. *Rapports Annuels*, Kinshasa.
- チャヤーノフ, V.A., 1927.『小農経済の原理』刀江書院。
- Chayanov, V.A., 1966. *The Theory of Peasant Economy*, (Thorner, Kerbley & Smith, eds.), Illinois.
- Cliffe, L., 1987. "The Debate on African Peasantries" *Development and Change*, Vol.18, pp.625-635.
- Coquery-Vidrovitch, 1976. "The Political Economy of the African Peasantry and Modes of Production," (in Peter C.W. Gutkind and Immanuel Wallerstein 2eds), *The Political Economy of Contemporary Africa*, Beverly Hills, Saga Publications.
- 江口信清, 1985.「農民間の非平等性とランキング・システム, ドミニカ農民の事例研究」『民族学研究』49巻4号。
- Emmanuel, A., 1972. *Unequal Exchange, -A Study of the Imperialism of Trade*, Monthly Review Press, New York.
- Forbath, P., 1977. *The River Congo*, New York, Harper and Row.
- 福田アジオ, 1992.『柳田国男の民俗学』。
- Geerts, C. 1963, *Agriculture involution*, Berkeley: University of California Press.
- ギアーツ, C., 1987.『文化の解釈学』岩波書店。
- 原洋之助, 1985.『クリフォードギアーツの経済学』リポート。
- 林晃史編著, 1989.『アフリカ農村社会の再編成』アジア経済研究所。
- 半澤和夫, 1993.「第5章 ケニアにおける商業的農業の発達とその特徴」,『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所。
- Hyden, G., 1980. *Beyond Ujamaa in Tanzania*.-

- Underdevelopment and Uncaptured Peasantry*, Heinemann, London.
- Hyden, G., 1983. *No shortcuts to progress. -African development management in perspective*, Heinemann, London.
- Hyden, G., 1986. "The anomaly of the African peasant." *Development and Change*, Vol.17, pp.667-705.
- Hyden, G., 1987. "Final rejoinder (in the debate on African pesantries)." *Development and Change*, Vol.18, pp.661-667.
- 池野旬, 1988. 「ケニアの農村階層分化に関する一考察—移動労働者の排出とその送金をめぐって」『アジア経済』XXIX-7・8
- 伊谷純一郎, 1986. 「人間平等起源論」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学』アカデミア出版.
- 市川光雄, 1982. 『森の狩猟民』人文書院.
- 掛谷誠, 1974. 「トングウェ族の生計維持機構」季刊人類学 5-3.
- 掛谷誠, 1986. 「伝統的農耕民の生活構造」『自然社会の人類学』アカデミア出版.
- 掛谷誠, 1994. 「焼畑農耕社会と平準化」大塚柳太郎編, 『地球に生きる』雄山閣.
- Kasfir, N., 1986. "Are African Peasants Self-Sufficient?" *Development and Change*, Vol.17, pp.335-57.
- 児玉谷史郎, 1981. 「ケニアの小農場部門における農民の階層分化」『アジア経済』22巻 11・12号.
- 児玉谷史郎, 1984. 「ケニアの小農の兼業と階層分化」『アジア経済』25巻 7号.
- 児玉谷史郎, 1985. 「ケニアの小農の換金作物生産の発展と小農の階層分化」『アフリカ研究』第26号.
- 児玉谷史郎編, 1993. 『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所.
- Koponen, J., 1988. *People and Production in Late Precolonial Tanzania*, Scandinavian Institute of African Studies.
- 松田素二, 1983. 「アフリカ都市出稼ぎ民の再部族化現象—ナイロビのマラゴリ人出稼ぎ民の事例から—」『アフリカ研究』vol. 23.
- Macgaffey, J., 1987. *Entrepreneurs and Parasites*, Cambridge University Press.
- Maliyamkono, T.L. and Bagachwa, M.S.D., 1990. *The Second Economy in Tanzania*, Eastern African Studies.
- Meillassoux, C., 1964. *L'anthropologie Economique des Grouro de Cote d'Ivoire*, Mouton, Paris.
- メイヤース, C., 1977. 『家族制共同体の理論』筑摩書房.
- Popkin S. L., *The Rational Peasant*, Berkeley, Univ. of California. 1979.
- サンガ・N・カザディ, 1991. 「アフリカの文化」『東洋学術研究』Vol.30 No.3.
- Scott J., 1976. *The Moral Economy of Peasant*, New Haven. Yale Univ. Press.
- Sahlins, M., 1972. *Stone Age Economics*, Aldine Atherton.
- サーリンズ, M. D., 1984. 『石器時代の経済学』法政大学出版会.
- 末原達郎, 1990. 『赤道アフリカの食糧生産』同朋舎.
- 杉村和彦, 1987. 「『混作』をめぐる焼畑農耕民の価値体系」『アフリカ研究』31.
- 杉村和彦, 1987. 「ザイール農民論ノート」『農学原論研究ノート』5.
- 杉村和彦, 1994. 「共食に生きる理性」福井勝義等編『文化の地平線』世界思想社.
- 武内進, 1993. 「第6章 キンシャサ市向け食糧の生産・流通構造」児玉谷史郎編, 『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所.
- 丹野正, 1991. 「『分かち合い』としての『分配』」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社.
- Streiffeller, F. and Mbaya, M., 1986. *Village, Ville et Migration au Zaire, Enquete psycho-sociologique sur le mouvement des populations de la Sous-region de la Tshopo a la Ville de Kisangani*, L'Harmattan, Paris.
- Verhaegen, B. (Ed). Baruti. L.S.M.L, Mahieu, W., Yeikelo, B., Droogers, A., Bibeau, G., Corin, E., 1976. *Kisangani 1876 - 1976*, Presses Universitaires du Zaire.
- Verhagen, G., 1973. "Le developpment de l'agriculture paysanne au Zaire," *Zaire-Afrique*, No.76, Kinshasa, pp.345-360.
- 吉田昌夫, 1985. 「タンザニアの農村再編成」林晃史編, 『アフリカ農村社会の再編成』アジア経済研究所.
- 吉田昌夫, 1984. 「タンザニア村政策論争」『アジア経済』23巻9号.
- Wauthier de Mahieu, 1985. *Qui a obstrue la cascade? Analyse semantique du rituel de la circoncision chez les Komo du Zaire*, Cambridge University Press.